

古九谷

九谷焼は、色鮮やかな上絵付けが特徴である。その歴史は、2 つの異なる時代から成り立っている。古九谷は、17 世紀後半に作られた初期の作品を指す。その後、約 100 年間、生産が途絶えた。19 世紀初頭に九谷焼は復活し、「再興九谷」と呼ばれるようになった。

九谷焼は 17 世紀半ば、九谷村（現在の石川県南部）で磁器に必要な希少な材料である陶石が発見されたことから始まった。この地域は、前田家の分家が治める大聖寺藩の一部であった。当時、日本で本格的な磁器を生産していたのは南九州の有田だけであり、中国からの輸入は政情不安により減少していた。そこで、前田家は磁器の地場産業を生み出す機会を見出した。

1640 年頃、九谷に窯が建てられた。有田では、1630 年代から赤、黄、緑、青、黒などの釉薬が上絵付けに用いられるようになり、後藤の作風はその影響を強く受けている。古九谷の上絵付けは、緑、黄、紫、紺、赤の同じような配色が特徴で、現在では「九谷五彩」と呼ばれている。絵柄の輪郭を黒で描き、釉薬を厚くかけることで、深みのある大胆な色彩を表現するのが一般的であった。

現在、古九谷は大きく 2 つに分類されている。色絵は 5 色すべてを使うため、五彩手とも呼ばれることがある。色絵では素地の白地が少し見えるのが特徴である。これに対し、青手は赤を除いた、他の 2～3 色だけを使い、磁器の表面を完全に覆い尽くすようにデザインされることが多い。青手では、精巧な模様が施された黄色地のものが多い。

1700 年頃に生産が終了し、古九谷の時代は終わりを告げた。窯の規模や生産期間が限られていたため、真の古九谷は比較的少数しか残っていない。しかし、後世の陶芸家たちがその作風を再現し、発展させたため、古九谷の色彩やモチーフは、現代の石川県の陶芸に欠かせないものとなっている。